

妙高工場の歴史

建屋遺産～赤煉瓦建屋～

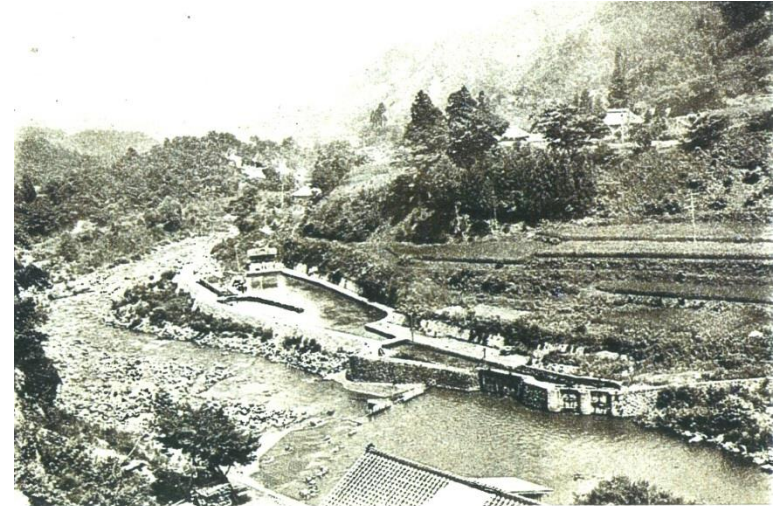


1. 上越電気時代(1907年～1922年)

妙高工場の源流であり、東北電力の前身の一つでもある上越電気は、1906年に設立されました。翌年、新潟県妙高市蔵々(ぞうぞう)に建設した蔵々発電所は、現存する県内最古の発電所で、日本海側としては当時最大規模であり、上越の近代化の原点となりました。

1909年、妙高市田口(現在の当工場敷地)にその電気をを用いてリンとカーバイドを製造する電気化学工業所を誘致し、1916年には電気化学工業所を母体とする東京電化工業が設立され、1918年には赤煉瓦建屋が建設されました。

上越電気は、1912年に糸魚川電気との合併を機に越後電気に改称し、その後東京電化工業や日本亜鉛(亜鉛・フェロマンガ製造)などに電力供給をしました。



蔵々発電所(1907年建設)取水口



現存する赤煉瓦建屋

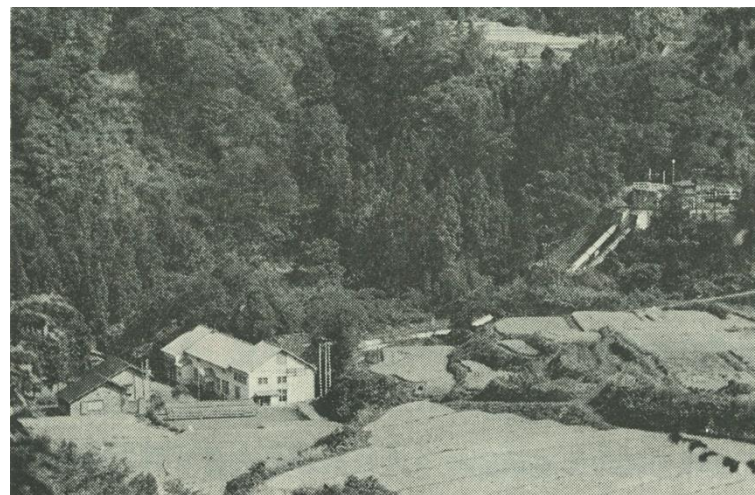
2. 中央電気時代(1922年～1934年)

越後電気は、松本電灯等との合併を経て1922年に中央電気となり、翌年隣接している東京電化工業と日本亜鉛を買収して自社の化学工業部(田口工場)としました。

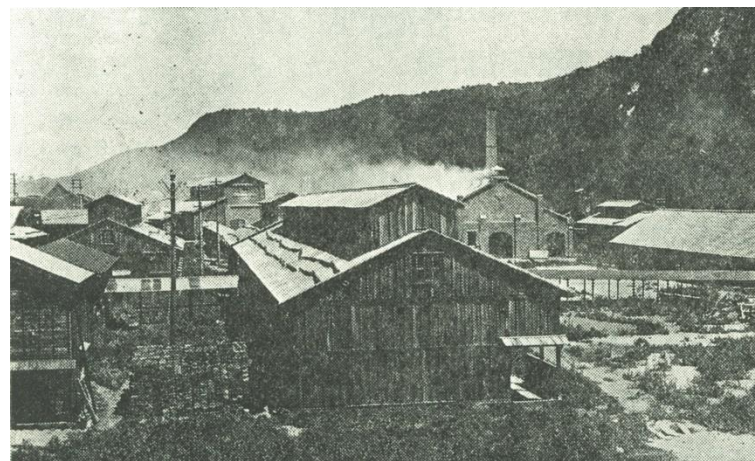
中央電気は、世界恐慌後の景気回復を契機に電源開発を推進した結果、発電所の余剰電力の消化問題が発生しました。

そこで、低炭素フェロマンガンのため安価で大量の電力を必要としていた秩父電気工業(現:昭和電工)との共同出資により、1934年に低炭素フェロマンガ製造会社、中央電気工業を設立しました。

また、中央電気は1942年に電力国家管理法により日本発送電・中部配電・東北配電に分割出資し解散しました。



蔵々発電所

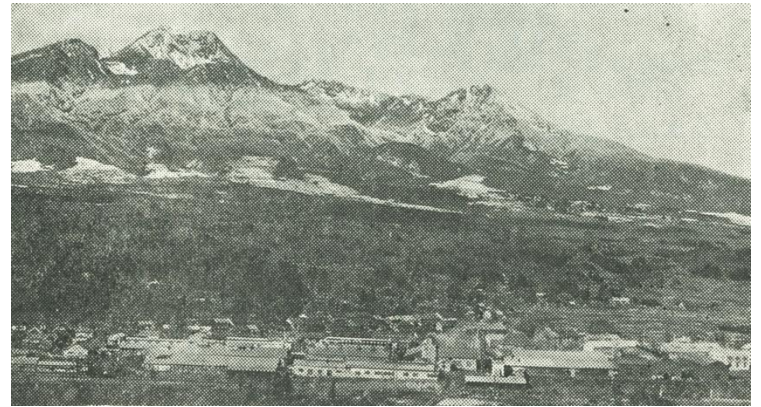


当時の中央電気田口工場
写真右奥が赤煉瓦建屋

3. 中央電気工業時代(1934年～2018年)

中央電気工業は、1942年に航空機の素材原料となる電解金属マンガンの製造を開始しました。1943年には住友金属工業(現:新日鐵住金)が海軍の要請による戦闘機用の超ジュラルミン等アルミ合金量産のため、経営に参加しました。

太平洋戦争終結後は、戦後処理と再建、鹿島工場(茨城県鹿嶋市)の建設、オイルショック後の厳しい環境下での合理化・多角化、合金鉄事業の鹿島工場への集約等を経て、妙高工場(2003年に田口工場から改称)は、水素吸蔵合金やマンガン化成品の製造工場となりました。



中央電気工業創立当時の田口工場



中央電気工業創立当時の田口工場事務所(右側)

4. 新日本電工(2018年～)

2014年、同じマンガン系合金鉄を主力製品とする日本電工(現:新日本電工)と経営統合をしました。

2018年に両社は完全統合を行い、当工場は中央電気工業妙高工場から新日本電工妙高工場となりました。

当工場に現存する赤煉瓦建屋は、激動の時代を経て、「上越地方産業発祥の地」を示す貴重な建屋遺産となっています。



妙高工場全景



「東京電化工業(TDK)」が使用していた名残として、建屋上部中央にマークが残っています



現存する赤煉瓦建屋

5. 妙高工場統合系図



妙高工場から妙高山を望む

